

## えびす講(魚取祭)

「特別展 氷見の漁業と漁村の暮らしⅡ」(氷見市立博物館 2001年編・刊、47頁・48頁)

### ○ 町方のえびす講

氷見浦から灘浦の海岸部には、えびす神を祀るえびす堂や魚取社(なとりしゃ)が点在する。元来は、漁猟に従事する人や、漁を生業とする漁民等に大漁をもたらしたり、海上安全の守り神であったものが、後には漁家だけでなく商家や農家にも受入れられ、また「えびす大黒」と並称されて商いや交易、農作物の生育を見守る生業全体の守り神や福德神として農山村や都市部へも浸透していった。氷見地域では、おもに幕末の文化・文政期頃に、漁猟の守り神として勧請されている。旧氷見町の今町(現・中央町)、浜町(現・比美町)、湊町(現・比美町)の浦方3町では、おのおの町内に魚取社が鎮座する。毎年5月20日と11月20日の年2回、春秋の魚取祭例祭が行われるほか、5月3日の唐島祭りに併せて例大祭が斎行される。例祭には、以前は町内から多数の参拝者があったが、近年は町内代表者と宮総代等のほか年配の女衆等がお参りする。漁師や町内の人たちは、通常魚取祭とはいわずにえびす講と知っている。祭礼日には、神前に町内地先の各網から季節の魚としてアカダイ(真鯛)やクロダイ・ガンド(小型のブリ)などのほか、町内の蒲鉾店から昆布巻きや赤巻きカマボコなどが供えられる。祭典終了後、社殿で神職と参列者らにより直会が行われ、御神酒のほかお下がりとしてカマボコが切られて振舞われる。

灘浦の藪田地区では、毎年6月10日と11月20日の春秋の魚取祭が斎行される。地元では、三柱社をえびす堂といい、魚取祭をえびす講とよぶ。「えびす講は、潮水で手を洗っている者の祭り」、つまり漁師の大切な祭りとされ、神前に季節の魚が供えられる。祭典の祝詞のなかで、藪田地区に敷設されている大敷網や小網のほか、地区内に所属する個人操業の船名が全て読み上げられ、各々の大漁と無事安全が祈願される。同様に灘浦の小杉地区でも、6月10日と11月20日の両日、春秋の魚取祭(えびす講)が斎行される。魚取祭は、小杉菊理姫像石神社の境内末社えびす堂で行われ、区長や地元有志連中のほか、灘浦定置漁業組合の関係者等が参列する。祭典の祝詞のなかで、小杉地区だけでなく灘浦地先の「前網大敷」や「島大敷」、「前網岸大敷」、「樽水大謀」など大敷網とよばれる大型定置網や、小杉地先に敷設の「小杉小岸」や「前小岸」、「松岸小岸」など小網(小型定置網)の大漁と海上無事安全が祈願される。祭典終了後、参列者は御神酒を下ろし一口戴いて直会に代えているが、定置網が個人操業で行われていた昭和10年代頃は、船元や網元の家を祝宴場として盛大な直

会が催された、という。また、氷見市街地の北端に連なる間島地区では、近年漁猟従事者が少なくなったが、5月20日と11月20日の両日に各々春秋の魚取祭（えびす講）が斎行される。参列者は、漁師や元漁師等のほか、地区の子供連れの老若男女が参列する。



小杉魚取社御神像



小杉魚取社（えびす堂）



藪田三柱社（えびす堂）